

はじめに

立命館大学人間科学研究所主催のもと、応用人間科学研究科、文学部人文学科教育人間学専攻、人間科学研究所「対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究プロジェクト」子どもサブプロジェクト思春期部会の共催により、2004年10月～11月にかけて、「大人と子どもは出会えるかー良い子とは誰か」というテーマで、3回の連続講演・シンポジウムを企画、開催しました。

第1回「良い子」の自分くずしと自分づくりー少年期不在を問う、第2回大人は第二の誕生を手助けできるか、第3回自分探しとはなににかー自己実現幻想を問う、という毎回のテーマ設定にも象徴されていますが、明快な回答を提供する場ではなく、少年期・思春期・青年期の子どもに関わる「問い」を報告者と参加者で共有しながら、一緒に考えて行こうとする趣旨を持った企画でした。

とりわけ今回の企画では、いわゆる「良い子」に焦点化しながら、大人は子どものことを考えながら対応しているつもりであっても、どこかで子どもの考えや価値観とずれていないか。ずれているとすれば、その背景には何が潜んでいるのか。また、今日の少年期・思春期・青年期の子どもたちの発達課題を、どのように捉えていけばよいのか。大人たちと子どもたちが、お互いの存在を認め合いつなげていく道はあるのか、といった「問い」を大切にしてきました。

そのために、竹内常一氏、高垣忠一郎氏を初めとして、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学などの教育現場や相談現場で、広く深く根を張って活躍しておられる方々を講師・パネラーとして招きました。

竹内氏は、「身体論・行動論」「関係論」「価値論・文化論」から、少年期の子ども世界の課題に迫ることを提起し、高垣氏は、「親の自己愛の延長ではなく、子どもの他者性を認め」、「脅しと比較の子育てや教育をやめる」ことから、思春期の子どもたちの第二の誕生を手助けできるのではないかと提起しています。

更に青年期の課題に触れて竹内氏は、少年期・思春期の「身体的な応答関係」から、「自分たちの文化・言葉を編み上げる」青年期のテーマを取り上げ、大人の側にこのような「異なる他者との共通語をつくっていく」課題があるのではないかと提起しています。その他にも、パネラーによる多様な学校現場、相談現場の報告、討論から示唆を受ける点が多くありました。

当初より、研究報告書を期待する声が高く、講師、パネラーを初めとして、学生・院生スタッフ、人間科学研究所事務局の石田昌幸氏、横山友香氏など、関係者の方々

の協力を得て、学術フロンティア推進事業プロジェクト研究の一環としてここに発刊できたことを、心より感謝申し上げます。

編集責任

滝野 功

(人間科学研究所運営委員・応用人間科学研究科教授)

春日井 敏之

(人間科学研究所運営委員・文学部教授)

